

教に随順する道なのである。第十除業名以下は、この自力の見を滅却する方法を説き、終に至つてその滅却された相を述べるものである。以上の如くして有執の世間が縁起・空に悟入する道・方便は開かれたのである。

さて、再び元にさかのぼつて考えるに第九易行品の初における問者の見る世間は實相の世間ではなく、自力執心の見による世間である譯であつて、従つてそれは各人各様の世間となる。これを天親は偏計所執性であるとせられる時、ここに一つの問題が起る。それは、各人各様の偏計所執性の世間と、常住なる圓成實性との關係はどうなのであろうか。この關係が明らかにされない限り偏計所執は永遠に圓成實性に悟入する道はないのであつて、ここにあの綿密な識縁起説が説かれた所以があると云へようか。云いかえるならば、能所の見が摧破されれば、そこに世間はそのまま縁起・空の世間であることに間違はないが、しかし實際の人間社會は、能所相對する有執の見の生活であつて、それは各人各様の識自らの顯現としての相分と云はるべきものであ

る。現實の人生が相分以外にないと云うことになれば、かかる人生が縁起・空なる悟りの世界に入る道は、その相分において、悟りの世界に入る道・方便が説かれねばならない。その道・方便を明らかにするのが識縁起説であらう。

この様にして、佛教の根本思想たる縁起・空従つて又、般若波羅蜜を現實人生生活の上に證得し、斃傷すべき世間の菩薩道たらしめんと眞劍であればある程、そこに痛感せられる事實は、環境の影響と云うことであつて、この事は「大無量壽經」に既に教示せられているところである。人生の現實に深き反省をいたし、佛教と相應せんことを只管願つた天親は、それだけに又、衆生所願樂一切能滿足の國土、遇無空過者能令速滿足切徳大寶海の願心莊嚴の淨土を願生し、觀察することに菩薩道不退の極致を見出した譯である。

### 空觀と唯心觀

安井 廣濟

インドにおける頓漸の教判として『入楞伽經』に依る頓漸の教判が一般に知

られているが、清辯 (Bhāṅviveka) の『般若燈論』にこれとは趣きを異にした次のような頓漸の教判があることは、未だ知られていないようである。

(唯識派がいうように)、最初に境の無我を觀じ、漸次 (Krama) に識の無我を觀ずる場合には、漸次に無我の證悟を得ることになる。それゆえ最初から頓 (Yugapad) に境と識との無我を觀ずることに骨おしむべきでない。

(般若燈論、第二十五章)

右に明かな如く、この清辯の頓漸の教判は、唯識派の教學を漸教とし、清辯自らの中觀派の教學を頓教とするものである。しからば、なにゆえに清辯は唯識派の教學を漸教と見なすかといへば、唯識派の教學は、一切の存在をわれわれが認識するがままの内容 (artha 境) のなご、唯識無境なるいはば夢幻の如き空しい存在と見る學説であるが、しかし唯識派は唯識という境のない夢幻の如き空なる否定的眞實をひとまず觀智の對象とする。ことにより、これを方便とし階梯として、その唯識をも超えた絶對的な空無相の世界への悟入をはかろうとするからであ

る。唯識派にとつて、唯識という空なる眞實(＝空なるもの)は、観智すべからざる絶對的な空無相の世界へ悟入するたゞの過程的な方便となる漸進的段階の道(marga)という意味をもつのであつて、この點において唯識派の教學は漸教たる性格をもつてゐる。ところが中觀派の教學は、いはゆる「心境俱空」(境と識との無我)を立場とし、唯識派の教學の如くひとまず「境空心有」なる唯識を觀智の對象として設定するという如き、過程的な知的方便の道を認めない。中觀派の教學は心境俱空なる空無相の世界へ慕直に悟入せんとする。清辯が自らの中觀派の教學を頓教と稱するのはこの所以であり、ここに中觀派の空觀は、唯識派の唯心(識)觀と異つた特色をもつてゐる。

もちろん、中觀派の教學は空無相の世界へ悟入するための知的方便の道を全く認めないというわけではない。一切の存在を夢幻の如き空なるものとして認識し観智するという道なくしては、空無相の世界への悟入は果たしうべくもないからである。ただその場合、悟入の道として観智せられる空という否定的眞實(＝空

なるもの)は、唯識(無境)というかたちでは観智せられない。中觀派の空觀もまた、一切の境を夢幻の如き空なるものとして観智するのであるが、しかしその場合、空觀にとつては、境がただちに空なるものであり、空なるものがただちに境であつて、唯識派の唯心觀の如く、境が空せられて空なるものである唯識(＝境空心有)が観智されるのではない。境を空なるものとして観智するということはあくまで境の空にただちに徹することであり、空なるものである唯識をも残らずに境の空のうちに解消せしめる如き境識俱泯(＝心境俱空)の意味をもつ。一切が空なるものとして認められ、空なるものが空無相の世界への悟入のための方便の道として観智せられつゝ、その観智せられる知的方便の道が同時(yugapat)に空無相なる絶對的な眞實として行證される意味をもつのである。空觀にとつて、知ることとはただちに行うことであり、道が寸刻と雖も知的な方便に止まることは許されない。道はただちに速頓に空無相の世界へ媒介されるが如き知即行的な道でなければならない。中觀派の教

學はこのような意味で頓教と考えられるようである。

それゆゑ、あくまで寸刻をまたない嚴しい速頓の道その可能不可能を問はず、たゞまず行せんとする中觀派の空觀は、まことに難行道といふべきであらう。これに反し、唯識をひとまず觀智の對象とし、漸次に唯識の觀想を深めゆく唯識派の唯心觀は、われわれが少くとも一應なりとも行いうる道であり、空觀にくらべるならば易行道といふことができ。月稱(Candakīrti)が『中論註』の第十五章において人所化の人々の智慧にしたがい、勝義を智見する方便になるがゆゑに、未了義として、世尊によつて大悲をもつて識論が説かれたといふのは、唯心觀が機根の劣れるわれわれのため易行道であることを語る言葉であるといつてよい。しかしながら、先に清辯が八最初から頓に境と識との無我を觀ずることに骨おしめすべきでないといつたように、あくまで寸刻をまたない速頓なる身を暗した嚴しい境識俱泯の空觀が、忘れられてならないことはもとよりである。唯心觀はつねに空觀的な深さをまたねばならない。